

第34回 北勢線の魅力を探る報告書

新しい阿下喜の魅力を訪ねる



軽便鉄道博物館



近藤以徳先生碑



佛念寺



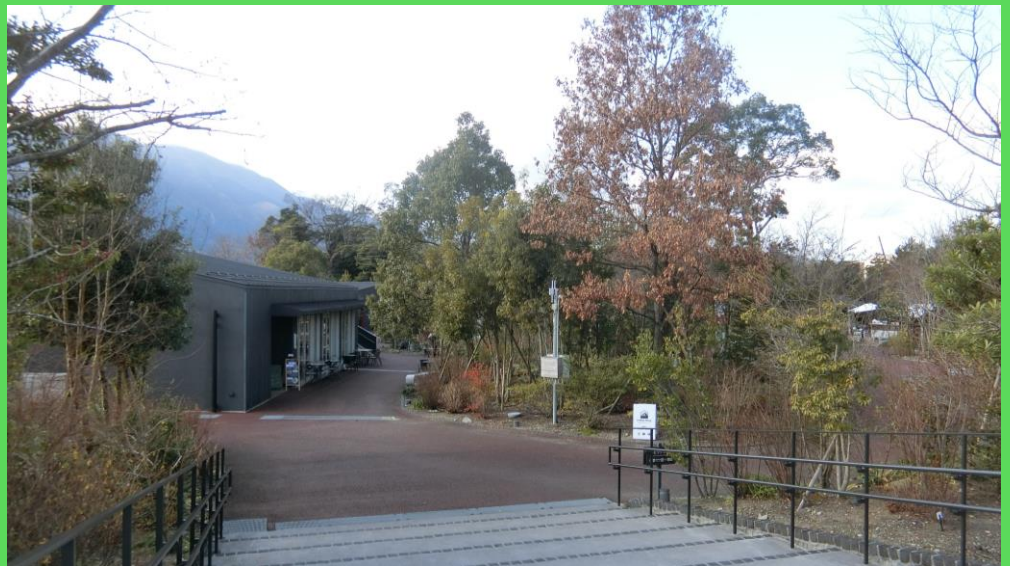
相願寺



旧阿下喜駅舎



桐林館



にぎわいの森

日時：2024年3月20日(水・祝)

主催：北勢線の魅力を探る会

後援：桑名市、いなべ市、東員町、北勢線事業運営協議会、三岐鉄道株式会社

桑名歴史案内人の会、ふるさといなべ市の語り部の会

第34回北勢線の魅力を探る「新しい阿下喜の魅力を訪ねる」

参加者 39名（内1名子ども）

協力 ふるさといなべ市の語り部の会、佛念寺、相願寺、グリーンクリエイティブいなべ

けいべんてつどうはくぶつかん
軽便鉄道博物館

西羽 晃

阿下喜駅前で近藤代表が挨拶して、出発となった。まず駅の横へ移動して、軽便鉄道博物館を見学の段取りだったが、館長が今日は不在なので、中を見ることはできなかった。外に出ている初期の車両とレール、ターンテーブルを見る。



近藤代表の挨拶



ターンテーブル

車両は北勢線が電化され、阿下喜まで開通した時（昭和6=1931年）の電車（モニ220型



モニ220型226号

226号車で、北勢線で使われたのち、内部八王子線で昭和58（1983）年まで使われ、四日市のスポーツランドで展示されていたが、平成16（2004）年にボランティアの「北勢線とまち育みを考える会、ASITA」によって、阿下喜駅横に移設修復された。ターンテーブルは阿下喜駅と接続する製材所で使用されたもので、製材所が廃止になって、移設された。レールは北勢線と同じ幅のナローゲージと

もっと狭い幅のレールが設置され、ここではミニ電車が開館時には運行される。

（開館は毎月第1・3日曜日（但し1月のみ第2・4日曜日、10時から16時）



開館時のミニ電車

近藤^{いとく}以徳先生碑

伊藤 忠

阿下喜駅より急こう配の牛馬坂を通り旧濃州道を「以徳」碑をめざし雨の中、傘の行列で阿下喜の坂道を歩きました。途中自噴(じふん)井(せい)やマンボのあるお屋敷を眺めながら先生の碑に辿り着きました。

近藤似徳、幼名勇次郎(1863年-1909年)さんは明治、大正時代に、洋学で郷土の近代化に尽くされた郷土の偉人です。

顕彰碑の碑文には(抜粋、解説){先生は通称 近藤似徳 号は晩香 阿下喜村に生まれ父 八蔵 母 佐以 阿下喜小学校卒業後、治田村の服部之鶴の訓導を受けその後、東京で英語、数学を学び明治22年故郷に帰り英語学館を開設、懇切、風格、徳をもって子弟を導き門弟300余名に慕われる。

明治43年2月、病没、享年48歳、葬は見性寺鳴呼師 10余年後生徒により記念碑を建立(こんりゅう)、 永くこの恩を讃へ学館跡地に建碑、大正12年孟(もう)春(しゅん)}(陰暦の1月・初春・4月) 碑文にはこの様な事が書かれています。

先生は中学卒業後、服部之鶴さんに漢学経史、蘭学を教わりご子息の巽さんから英語、数学の修業を積み、21歳で、金 拾7円(現在のレートは1円は約2万~2万5千円位)を懐中にして上京、梅辻塾に入り和漢、英語や数学を学びその間オランダ商館に勤めて洋学を修め中村敬宇(けいいう)の同人社で英語や数学の研鑽を深めました。

22歳の時、自力で神田(東京)に私塾「開成義塾」を設立 英、漢、数学を教え、郷土の人材育成の為、27歳で阿下喜に戻り、似徳と改名「員弁英語学館」を設立、寄宿舍まであり生徒は員弁郡内、桑名郡、朝明郡まで及び卒業生は県下の教育の先導者になりました。

私が子供の頃、近くのお年寄りが英語を話されていたのが不思議でした。

小雨の中次の目的地、佛念寺さんを目指しました。



語り部伊藤忠さんの説明



雨の中説明を聞く



近藤以徳先生碑

突然の悪天候に見舞われた一行、御住職に本堂に招き入れられたものの、多くの参加者が靴の中まで濡れてしまっているからと遠慮していた。それでも御住職が構わないですと受け入れて下さり、温かい本堂内で解説して頂いた。



佛念寺入り口



本堂内に上がる



池井住職の説明

当寺は現在は真宗大谷派に属する寺院であるが、口伝によると創建時は天台宗寺院であったと伝わり、慶長年間(1596～1615)に良善により浄土真宗寺院として再興されたようである。当寺は後述する事情により、古書がほとんど伝わっておらず、その歴史は明らかになっていない。唯一とも言える昔を伝える記録は、四世秀山が作った過去帳のみであり、寛文7(1667)年から記載が始まっている。開山一世良善から十一世であられる現御住職までは、おそらく世襲で継がれているとのことである。

現御住職の祖父である九世秀俊が39歳で早世した為、父で後の十世となる秀雄師は小学生ぐらいの年齢で独りとなってしまい、その為、遠く福岡県福岡市にある恵日山西教寺(現在は浄土真宗本願寺派)へ小僧として修行に行くこととなった。その間、当寺は無住状態となり、別寺院の僧侶が管理を代行をしていたものの、この時に寺宝や古書類などことごとく散逸してしまったとのことである。修行を終えて住職を継ぐため秀雄師が当寺に戻った際には、茶碗一つも残っていないという有り様だったという。残念ながら秀雄師も49歳という若さで早世してしまった為、その妻、現御住職の母が坊守として住職を代行した。現御住職は昭和45年4月28日に十一世として就任、以来今日まで50年以上住職として務められ、近年は当宗派の教えを題材に、わかりやすい話で表したものを冊子にして刊行するなど、布教活動にも勤しまれている。

=伽藍=

<本堂> 明治 33(1900)年 3 月 15 日再建。御住職曰く、近隣にある同宗派の仏生山相願寺の本堂の方が先に建ち、それを参考にしたとのことである。

<旧書院> 座敷と通称される。明治 37(1904)年にどこか別の場所で建築され使用されていたものを、その後当寺に移築された。現在はほとんど使用されていない。

<書院・庫裏> 昭和 50 年代に再建される。

<鐘楼堂> 昭和 38(1963)年建築。

<寺号石> 境内参道入口右側に在る。現御住職の揮毫による。

<駐車場> 令和に入り境内地の東側の土地を駐車場として整備した。参拝、拝観時に駐車可能。

<吉野桜> 近所の商店が閉店する際に譲り受けたもので、樹齢は推定 80~90 年ほど。4 月上旬には見事な花を咲かせる。

<スペース册> 庫裏の東側の建物で、御住職の娘様の建築による美術品展示施設。御住職ご家族を始めとするご縁のある方々の美術品を展示する。

=寺宝・什物=

<本尊・木造阿弥陀如来立像> 本堂内中央に安置。来歴は不明。

<親鸞聖人御影> 江戸期に本山より授与。本堂の内陣の右脇担（中央奥の間、本尊に向かって右側）に奉懸される。

<蓮如上人御影> 江戸期に本山より授与。本堂の内陣の左脇担（中央奥の間、本尊に向かって左側）に奉懸される。



本尊・木造阿弥陀如来立像

<現如上人御影> 当派第 22 世法主。本堂の内陣の左脇担、蓮如上人御影の右側に奉懸される。

<聖徳太子ならびに七高僧御影> 江戸期に本山より授与。本堂左余間（左奥の間）に奉懸される。

<喚鐘> 本堂側面、向かって左側南面に掛けられる。元文 3(1737)年制作。元々は近隣にある飯倉山地高禅寺(現・飯倉山慈光院)の什物のようである。

<梵鐘> 鐘楼堂に掛けられる。昭和 24 年 3 月鑄造。

冷たい雨霰から体を温め一息ついて当寺を後にし、一行は次の目的地稲垣家のマンボへと向かった。

尚、境内は季節の花々、木々で彩られており、参拝散策自由とのことである。また、本堂内や裏庭にある陶製の個性的な羅漢像や、境内にある「スペース朋」の作品も拝見することができる。裏庭やスペース朋の拝観は庫裏を訪ねて頂いて対応できるときは歓迎するとのことである。その際にはぜひ本堂にも参拝され、御住職執筆の冊子『皆さんいかがお過ごしですか』も無料配布されているのでお手に取ってご覧頂きたい。



陶器の羅漢像



鐘楼堂



庭の花

稲垣家のマンボ

土井 忠之

冷たい風雨の中で本堂に上げてもらいしばしの暖をとった佛念寺を出発し、阿下喜市街地のメインストリートを横断して稲垣家に向かいました。

稲垣家は代々専八を名乗る実業家で、先代専八は大正時代に北勢線が開業した時には北勢鉄道の専務として中心的に関わっていました。また、代々作り酒屋として阿下喜の経済を支え、裏庭に自家用のマンボを所有していました。



稲垣家の正門と母屋

前当主の稲垣晴彦氏の著述によると、稲垣家のマンボは1769年（明和6年）頃に掘られたと推定され、全長約150m、トンネルの高さが約180cm（1間）・幅が90cm（3尺）あり、夏は冷たく・冬は温かな14°Cの地下水が流れていたということです。生活用水と酒造り用水として使用していましたが、1970年代以降は道路舗装や溝のコンクリート工事によ

って地下への水の「しみ込み」が減少し、降雨期以外は渇水状態になっているということです。

そのマンボ（地下用水路）を見ながら、私から阿下喜の地形（隆起扇状地）・地下水位と土地利用や集落の立地について、いなべ語り部の会の藤井かをりさんからは現在阿下喜に存在するマンボについて、それぞれパネルや資料を使って解説・ガイドしました。



小雨の中でマンボの解説

現在は渇水期なので残念ながら地下水は流れていませんが、地表から数段下がった稲垣家のマンボ（地下の施設）を交代で見てもらいました。



稲垣家裏庭のマンボ小屋



1週間後、マンボには水が流れていた！

マンボとは、水源まで縦穴を連続して掘ってその底を横穴で繋いで地下水を集水・流下させる地下用水路で、鈴鹿山脈東麓に位置するいなべ市（北勢町・大安町）や鈴鹿市（亀峰地区）に多く存在しています。特に、総延長1 kmにも及ぶ大安町の片樋のマンボ（万風）は観光資源としても有名となりました。

北勢地域のマンボは「間歩」「間風」などと書かれ、江戸時代に開発された治田鉞山の坑道掘削技術が地域に伝播され、鈴鹿山麓の乏水地形の地域に広がっていたのではないかと考えられます。

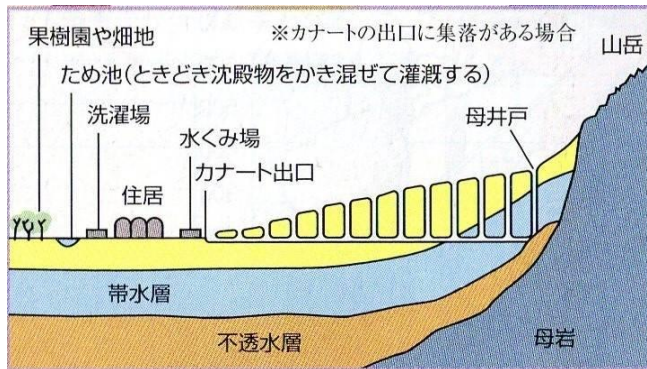
北勢地域の地下用水路のマンボは、世界的にはイランのカナート・中央アジアのカレーズ・中国西域のカンアルチン（坎兒井）・北アフリカのフォガラなどとの類似性がこれまでも多く指摘されてきました（掲載図参照）。水の得にくい砂漠地帯や乏水地形の扇状地ではこの

ような地下用水路が古くから作られてきましたが、まさにマンボは飲料・灌漑用水として歴史的に構築されてきた貴重な文化財なのです。

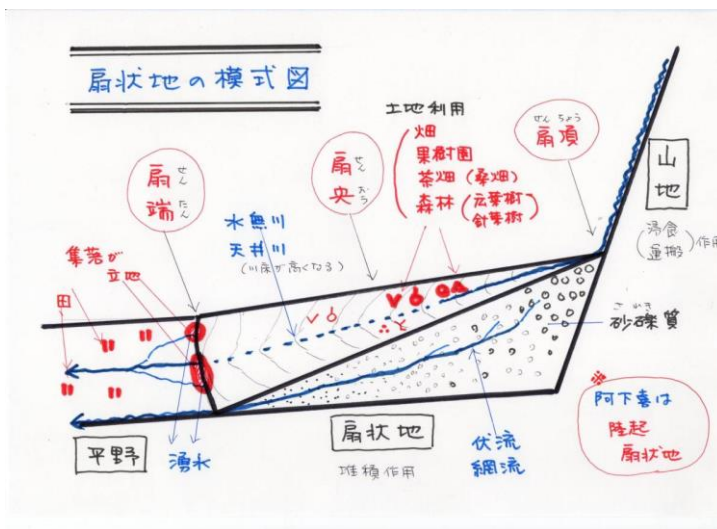
北勢町の阿下喜地区はいなべ市の中でも最も大きな中心集落で、地形的には隆起扇状地上に位置します。阿下喜市街地の東西の通りはほぼ水平ですが、南北の通りは緩やかに傾斜しています（今回のウォークでも阿下喜駅からぎわいの森まで結構登って行きましたね）。まさに阿下喜の町は今よりも古い地質時代の更新世の扇状地の上に広がっているのです。

扇状地とは一般的に、山地から平野部に河川が出るところに形成される堆積地形で、流速の違いによって浸食・運搬作用から堆積作用に変化するため、運んできた土砂が扇を広げたように堆積します（模式図を参照）。

扇状地の扇中央部は粒子の荒い砂礫層で構成されるため、流下してきた河川水は地下に浸透して伏流水となり、地下では自由に網流します。従って、扇頂部からしばらくは河道に見えますが、扇中央部から下流にかけては河原だけの水無川となります。また、堆積が激しい（氾濫が繰り返される）河川では、河床部分が周りより高くなって天井川になります。一般的に道路や鉄道は河川を橋で渡りますが、扇状地では天井川になるため道路や鉄道が河川の下をトンネルで潜ることになります（養老山地の東麓を走る養老鉄道には2つの短いトンネルがありますが、トンネルの上は実は川なんですね（?!））。



イランのカナート断面図
(地理資料(とうほう)より)



扇状地の模式図



地下の砂礫層

扇状地の扇央部は地表面で水が得ることができないため水田を作ることができません。扇央部の土地利用は、少ない水で耕作できる畑や果樹園・茶畑（昔は桑畑）など樹木栽培となり、耕地とならない所では森林（広葉樹林・針葉樹林）や荒地となって放置されます（樹木は少ない地下水を求めてしっかり根を張っていくからですね）。

扇央部で伏流した地下水は先端部で地表上に湧水します。湧水は河川（水無川）の下流部だけではなく、地下を網流したため先端部の各所で湧き出てきます。従って、扇状地の先端部には集落が帯状に連続して立地しているのです（上水道の発達した現代では水はどこでも得られるので、扇央部でも家を建てることは可能となりましたが・・・）。

以上のように、扇状地の扇央部は水の得にくい地形になるのですが、阿下喜の町は更新世に員弁川が作った扇状地が更に隆起して、現在の員弁川が流れている沖積面より 10m以上高い所に位置しています。阿下喜駅から霰（あられ）の降り出した中を牛馬坂を登って阿下喜の町に入りましたが、あの高度差（段丘崖）がちょうどこの隆起部分に当たります。

それではなぜ隆起が起ったのでしょうか。この答えは氷河との関係から考える必要があり、氷河性海面変動（glacial eustasy）の理論で説明しましょう。

地球の歴史の中で地質年代からいうと、現在は新生代第4紀完新世（1万年前～現在、かつては沖積世と呼んだ）に当たり、縄文海進など多少の海面の変化はあるものの、おおむね現在の海岸線の位置で海面は推移してきました。しかし、それよりも古い新生代第4紀更新世（160万～1万年前、洪積世）には寒冷期（氷期）と温暖期（間氷期）が何回か繰り返されました。最終氷期には今よりも海面が120mも低かったため、員弁川を含め木曾三川は伊勢湾口まで深い浸食谷を作っていたと考えられます。逆に間氷期には海面が今よりも高かったため、当時の河川が作った堆積面が現在の沖積面よりも一段高い位置に取り残されました。その平らな部分を洪積台地と呼び、員弁川の両岸に不連続に存在しています（員弁川左岸に位置する北勢町の其原、員弁町の楚原・笠田、東員町の鳥取や六把野などが、右岸では藤原町の東禅寺、北勢町の治田、大安町の丹生川・石樽などが、今の員弁川よりも一段高い平坦地である洪積台地にあたります）。

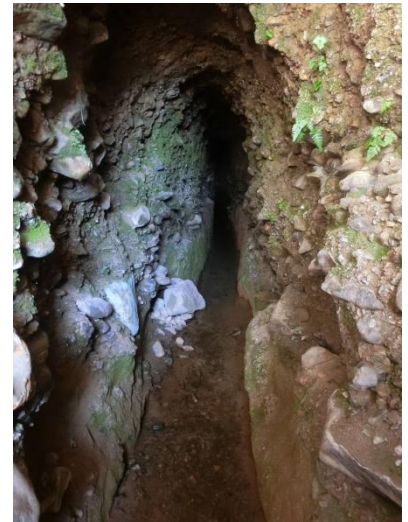
一般的に扇状地は山地から平野部に河川が出る砂礫層の沖積平野のため、水は伏流し地表水が乏しい地形で水を得るには大変苦勞する所です。さらに、阿下喜の町は扇状地が隆起してできた隆起扇状地なので、もっと地下水位は深くなり、飲料の生活水や水田の灌漑用水を

得ることがとても大変でした。そこで阿下喜の人々は少しでも水を得るために、町内に古くから多くのマンボを開削し、自噴井（掘り抜き井戸）が掘られました。阿下喜には自噴井が9ヶ所ありますが、今回はその解説を割愛します。

阿下喜には稲垣家以外にも多数のマンボが存在し、かつてはそれぞれ飲料水として、また農業の灌漑用水として活用されてきました。現在は上水道が普及し、大規模な



西町のマンボ



東町のマンボ

灌漑設備も構築されたので、古いマンボや自噴井は放棄されていきました。現在明瞭に確認できるマンボは西町に1ヶ所、東町に2ヶ所あり、地下水が染み出てきて緩やかに水が流れていました（後日藤井かをりさんに案内いただいて確認しました）。

ウォークから1週間後（3月27日・水曜日）稲垣家のマンボを再訪したところ、前日までに結構な雨が降ったせいか、マンボに地下水がとうとうと流れていました。

以上のように稲垣家のマンボの見学と解説を行った後、雪交じりの曇（みぞれ）の降る中、稲垣家の北側の歴史的な塗り壁の塀に沿って、次の見学地の相願寺と旧阿下喜駅舎に向かって、緩やかな扇状地を北に登って行きました。



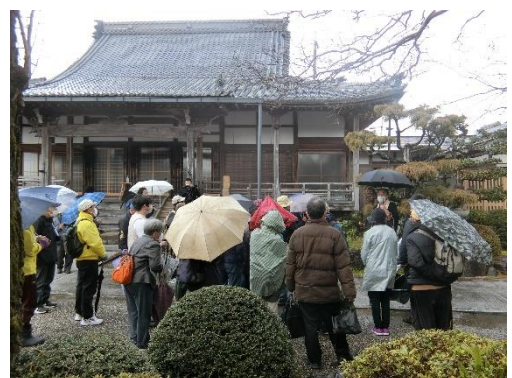
ぶっしょうざんそうがんに 仏生山相願寺

小雨降る中、稲垣家のマンボに感動した一行は、次の見学地の相願寺に到着です。

すでにご住職さんがお待ちで、お出迎えいただきました。

早速、本堂前の大きな顕彰碑の近くで、当寺のご説明をしていただきました。

山下 博子





説明される片山住職

住職によれば、当寺は仏生山 相願寺といい、本尊は阿弥陀如来で、戦国時代の天文年間(1532～55)に創立されました。もともと天台宗で開基は僧法正坊といわれます。江戸時代の貞享年間(1684～88)に浄土真宗大谷派(通称・お東)に改宗し、本山より寺号を許可されました。本堂の改修は明治 22 年より同 29 年 4 月までかかって完成しました。

また、この大きな碑は曾祖父である 11 代住職の片山 巖氏の顕彰碑で、この方は大正、昭和初期に同和問題に大変尽力された先駆者でそのご恩に報いるため、有志により昭和 25 年に建立されました。

片山 寛隆(かんりゅう)氏は真宗に改宗してから 14 代目の住職になります。先ほど訪れた佛念寺も大谷派で、同宗派は員弁川左岸に多いとのことでした。



片山巖之碑

ご住職に見送られ、次の目的地の旧阿下喜駅舎へと向かいました。

旧阿下喜駅舎

西羽 晃

昭和 6 (1931) 年に阿下喜駅が開業した時の駅舎は老朽化したので、建て替えられた。その時に ASITA の会長 (安藤たみよさん) 一家が解体部材を譲り受け、令和 3 (2021) 年に復元して、公開された。軒先の裳階 (ファサード) は同時代に建てられた、西桑名駅舎 (今は無い)、馬道駅舎 (現存) と同一である。昭和の雰囲気を残す建物で、内部の売店は当時のままで使われている。

プラットフォーム部分は敷地の関係から屋根は縮小されている。今日は館長が不在で、内部の見学はできなかった。



旧阿下喜駅舎の前で説明



復元された売店

桐林館は昭和 12 年 3 月に阿下喜町立尋常小学校として建てられました。その後、昭和 56 年に鳥坂野（とりさかの）に新校舎が完成し、移転するのに伴い、従来の校舎は取り壊される予定でしたが、地元からの建物保存の要望を受けて、正面の校舎が一部規模を縮小して同校地の北側に移築保存されました。そして、文化資料保存施設「桐林館」として昭和 59 年 2 月に開館を迎えました。国登録の有形文化財です。



桐林館という名前は建設当時、校庭に沢山の桐の樹が植えられており、その様子を表わしたものだそうです。校章は桐の葉の中に阿下喜の A の文字がアレンジされています。校章に英文字を取り入れるのは当時としては珍しいようで先進性が感じられます。建設当初は南北に 3 棟の校舎が並んでいて、東西と中央を渡り廊下でつないでいました。正面の校舎屋根は青色の瓦で葺かれ、屋根中央には小塔、左右には換気窓が付属しています。また正面入り口には玄関ポーチを設けており、戦前の木造小学校の姿を今に伝えています。

館内には、阿下喜小学校として使用されていた昭和 39 年頃の普通教室と校長室が復元されています。

一行は小さな木製の机と椅子の並んだ教室に入ってこの施設の管理人である宮崎和久さんからお話を伺いました。まるで小学生に戻った気分です。宮崎さんによると、机や椅子は現在の阿下喜小学校に保管されていたものをもとに、形状・材質を忠実に復元したものだそうです。廊



普通教室の様子

下側の窓の鴨居には番傘が吊されています。宮崎さんのあとに話されたこの学校で教員や校長を勤められた、元ふるさといなべ市の語り部の会員の井後純子さんの説明によると、下校時に急に雨が降り出した際に備えた置き傘だそうです。井後さんからは児童がいたずらで床の節穴に突っ込んだ傘が床下で開いてしまい抜けなくなってしまったエピソードなどが披露されました。



井後純子さん

隣は校長室になっており、重厚な格天井で、窓際には戦前に天皇陛下の御真影を保管していた金庫のような嚴重な扉を持つ奉安庫が鎮座していました。奉安殿として残っている例は他にもありますが、奉安庫として残されているのは珍しいそうです。校長先生の机や応接用ソファーなどは、今は廃校となった藤原町の立田小学校の校長室の備品をそのまま移設したものだそうです。

校舎の中を見学して外へ出たら、既に雨が上がり青空が見え始めて来ていました。校庭にはこれも珍しい二宮金次郎の石像が立っています。戦前にはこの場所に阿下喜の実業家から寄贈された銅像があったそうですが、戦時中に軍艦の材料として供出され、現在の石像はやはり廃校となった東藤原小学校の像を移築したものだそうです。



校長室の様子



奉安庫



二宮金次郎像

にぎわいの森

近藤 順子

雨もなんとか上がり、桐林館の裏の道に出て、にぎわいの森に向かいました。すぐに地藏堂があり、その脇に江戸時代宝暦6年（1756）に建てられた道標があります。「左くわんおん道」は飯倉の慈光院を、「右加いのみち」は貝野のことと語り部の伊藤忠さんが教えて頂きました。私達は左に進むと、道が折れ曲がった先に主要道路である県道5号があり、阿下喜西の信号をわたり、新しいいなべ庁舎の横にあるにぎわいの森を目指しました。途中両脇に田んぼのある道に入ると西風が強く、晴れているのに、西の山から流れてくるのか雨も少しぱらついて、体感温度がぐっと下がります。いなべ庁舎の横の建物、シビックコアの中に入ると、ほっと一息つくことができました。



北町地藏堂



道標



いなべ庁舎に到着



シビックコア1階



説明する加藤さん

（一社）グリーンクリエイティブいなべの加藤さんの説明を聞きました。

「グリーンクリエイティブいなべに転職・移住でいなべ市に来て3年、まだ阿下喜のことはわからないことも多いので、一緒に歩かせていただき、勉強になりました。

にぎわいの森は、令和元年5月に、新庁舎の開館と同時に開業しました。いなべ市は合併後も旧4町の庁舎で分散して業務にあたっていましたが、いなべ市のほぼ中心に位置するということで、ここに新庁舎を建設し、行政業務の一元化を行いました。

それと共に、このにぎわいの森も整備され、ここに訪れる人は年間約 35 万人で、市全体の観光入込客数の約 70 万人の半数近くを占めます。また、単なる商業施設ではなく、まちづくりの拠点として活用してもらうことも目的の一つで、土日にマルシェに出店してもらったりして、活相の場の提供をしています。この 5 月で 5 周年を迎え、これから 1 年掛けていろいろなイベントを行っていく計画です。」とお話しになり、また、いなべの産品を使った商品開発も手がけており、お茶かりんとう、いなべそば、石樽茶や梅を使ったクラフトビール、甘酒の紹介もありました。

ここで解散となり、あとは自由行動です。火、水が休みの店が多く、この日はキッチュエビオいなべ、カフェロブいなべ店の 2 店舗と臨時で開けてくださった Inabe's Shop のみの営業でしたが、Inabe's Shop ではいなべ関連の商品があり、皆さん、先ほど紹介された商品などを買っていました。私もお茶の甘酒を買って帰りました。雨や霰が降り、風もある中、参加者の皆さんが最後まで無事に歩ききることができて、本当に良かったです。



キッチュエビオいなべ



店内の様子



Inabe's Shop

第34回北勢線の魅力を探る 報告書

「新しい阿下喜の魅力を訪ねる」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail j-kondo@cty-net.ne.jp

発行日：2024年4月20日